

氏名（本籍）	原 田 明 夫（大分県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博 美 第 229 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉 Double Mother、Site Zero、Site Zero／上野台地 〈論文〉 非居住域におけるアートー存在契機と場の構造

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教 授	（美術学部）	田 甫 律 子
（論文第 1 副査）	”	”	（ ” ）	木 幡 和 枝
（作品第 1 副査）	”	”	（ ” ）	坂 口 寛 敏
（副査）	”	准教授	（ ” ）	鈴 木 理 策
（ ” ）	”	”	（ ” ）	井 村 彰
（ ” ）	東京工業大学	名誉教授		中 村 良 夫
（ ” ）	武蔵野美術大学	教 授		森 山 明 子

（論文内容の要旨）

本論文は、断層から、アースワークを中心としてサイト・スペシフィックな現代アートを読み解く。本研究は、場の空間構造を読み解く研究であり、実践を行う作家のための研究である。この研究の動機となったのは、山や浜辺での制作活動、また、既存の非居住域のサイト・スペシフィックな現代アートの作品のリサーチの中で、筆者が強く関心を抱いてきた問題「特定の場で、自己を感じる瞬間や状態が、どのような条件と構造からもたらされているのか」である。筆者は、この状態を「存在契機¹」と呼び、個別の研究対象を分析し、その条件と場の構造について検証を行った。題目に含まれる「非居住域」とは、フランスの地理学者オギュスタン・ベルク²の概念から援用した上で、「大地の空間」と解釈して扱う。したがって、本論の題目は、「大地のアートー大地での自己の存在を強く感じる状態と場の構造」とも言い表すことができる。

リサーチした現代アートでの存在契機の体験は重要なものであった。特にロバート・スミッソンの「スパイラル・ジェティー」、マイケル・ハイザーの「ダブル・ネガティブ」では、この存在契機が、自然との交感の中核にあるのではないかと感じた。また、工藤哲巳の「脱皮の記念碑」では、「断層」が存在契機の重要な条件の一つであると予感させた。このことから、上記の 3 作品を、本論の検証する対象作品に選ぶこととした。そして、サイト・スペシフィックな現代アートの事例のみならず、その共通因子を持つと考えられる古代の祭祀のうち、日本の事例を比較対象として取り上げた。これらの対象は、その時代や社会背景が異なるため、一般的には比較しがたいものだろう。芸術は現代において個人の自由な選択に基づく表現であり、アートの文脈と制度を通じて鑑賞者に体験されるが、祭祀は、ある社会で公認された集団によって、神霊を祀るため、公式に行うものである。しかし、ジェーン・エレン・ハリソン²が、指摘するように、芸術と祭祀は、「根」の部分に共通因子を持つと考えることができる。筆者はその共通因子が「存在契機」であると考えた。加えて、日本の祭祀は、地形と深く関わる場の構造を持つことから比較対象として、捉えることにした。取り上げたのは、葛籠尾崎湖底遺跡、焼山寺と黒瀧寺、向田の火祭り、フボー御嶽とイシキ泊の御嶽である。

第 1 章ではこの論の背景として、美術史的な文脈からアースワーク、サイト・スペシフィックについて述べる。

第2章においては、仮説を述べる。「存在契機」がもたらされる条件の主要な要素「断層」、「水」、「廃墟」を挙げ、それらを「物理的空間」と「観念的空間」の二つの位相から捉える。また、それらに付随した他の要素を挙げ、同様に読み解く。

第3章、第4章では、その「存在契機と場の構造」の仮説を検証するために、研究対象と比較対象の個別の事例について分析を行う。

第5章では、結論として明らかになった個別の分析結果を基に、相関的に捉え、存在契機の場の構造を導き出す。

「存在契機」のある場の要素には、「断層」、「水」、「廃墟」が見られ、これに準ずる形で、「音」、「におい」も認められた。また、これらの要素を、地殻が動く方向軸を基本軸として捉えると、「断層／水／作品／断層」の順となる。現代アートの事例には、特徴として「廃墟」が見られ、比較対象となる古代の祭祀には、「廃墟」はない。したがって、存在契機のある場は、断層と断層に挟まれる空間に、「水」、「廃墟」、「作品」によってもたらされる。

この結論は、今後、筆者が実践的に、サイト・スペシフィックな作品を制作する上で大きな指針となり、大地の解釈に基づく作品へのアプローチを導き出した。

場所毎の蓄積された大地の記憶から、ある場所を知る事、また、その上で、作品を生み出す事が重要である。本論は、その実践に向けての試論である。この試論を踏まえ、その地殻が動く軸線を基本軸として、サイト・スペシフィックな作品「Site Zero」(島根県大田市温泉津山つなみ跡)と「Double Mother」(石川県金沢市額谷石切り場跡)の展示を現地で行った。

博士展では、会場である東京藝術大学大学美術館を、上野台地として捉え、現地での展示と同様、上記の作品の基本軸を、上野台地での地殻の動く方向軸に重ね合わせて構成し、展示を行った。

注

- 1 和辻哲郎がいう「人間存在の構造契機」を援用し、著者による造語(本論第三章参照)
- 2 J.E. ハリソン著、星野徹訳『古代の芸術と祭祀』法政大学出版局、1974参照、p. 3、p. 24。